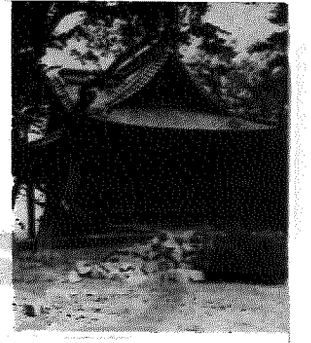

▶緒立八幡宮

緒立遺跡再び

緒立八幡宮は円墳

緒立遺跡は、広報一八五号（六月一日発行）でも特集しましたが、七月から、土器などの遺物の復元、調査が再開されています。

また、七月には緒立八幡宮周辺が発掘され、円墳であることが確認されました。

そこで、今号は再び緒立遺跡を特集いたします。

緒立八幡宮は、昭和二十七年の※1土師器、昭和四十五年の※2ふき石の発見で※3古墳であることが確認されていました。

今年の夏（七月十七日～二十六日）の十日間の調査は、※4円墳か※5前方後円墳か、年代はいつか、などより深く研究する為に行われたものです。

調査団は、国学院大学講師永峯光一氏を団長にし、同大学講師吉田恵二氏が調査を担当をされ、両氏を中心に同大学文学部史学科学生十名、地元作業員二十名で編成されました。

また、調査費用は国、県からの補助を受け、総額四百万円です。

調査は八幡宮本殿、拝殿を回周しているふき石を追う方法で、十ケ所の調査区域を設定。その区域をふき石の上面まで掘り下げ、竹ベラ、手ぼうき、移植ゴテ等で少しずつ土砂を排除するという手順で作業が行われました。

ふき石そのものは安山岩で、角田山、もしくは加茂周辺の山地から産出されたものと想像されます。

そして、ふき石は鋭く割られていることから、大きな石を緒立まで運び、砕いたと思われます。また、運搬は水路を利用し、角田山から産出したと判断されました。

ただし、方法としては加茂で石を砕き小さくして運んだということも否定はできず、このあたりが考古学の難しさです。

ふき石の置かれ方は、古墳の期底部に円を描くようにして、さらに中心に向かって直線状に置かれています。

そして、このふき石が本殿、拝殿の付近にしかなく、円墳であることが確認されました。前方後円墳ですと、八幡宮の石畳付近にふき石がなければなりませんが、発掘したところ、ありませんでした。

出土した遺物は、土師器、※7須恵器等の小片でした。古墳の遺物として予想された刀剣、鏡、玉などが発見されませんでした。その理由として、古墳に使われた土砂にそれら土器の破片が混ざっていたり、埋めもどしがあったために、刀剣などがかくはんされた為だと考えられています。

現在、円墳の中心の上に八幡宮本殿、拝殿が建っているため、円墳中心部の調査は困難です。中心部には当然棺が埋まっていると予想されます。

この円墳がいつできたのか、については、古墳時代前期（約千四、五百年前）と考えられますが、確認はされていません。そして、このようにしてできた円墳の上に緒立八幡宮が、（約六百～千年前、詳細は不祥）建立されたと思われます。

この八幡宮の古墳調査については、緒立遺跡とは別に国学院大学で研究され、来春三月に調査結果が発表されます。

まだまだ課題の多い緒立八幡宮の古墳ですが、将来の史跡（遺跡）公園化計画に向けて第一歩を歩み出したと言えるでしょう。

▶発掘されたふき石

◀史料館での作業

土器復元作業進む

遺跡発掘は、昭和五十三年から昨年までいずれも真夏に行なわれ、猛暑、湧水に悩まされました。

現在、舞台は常民文化史料館です。そこで、土器の復元作業、調査が進んでいますので紙上で紹介します。

I 遺跡発掘（53・夏～55・夏）

詳細は広報一八五号ですのでお読み下さい。

II 土器復元作業

①水洗い（55・10～56・4）

＊土器などの遺物に付着している土砂を洗い落とします。

＊土器の塗料が落ちないように注意します。

②注記（55・10～56・4）

＊約二万点の遺物に調査番号を記入します。

③分類（注記と同時進行）

＊全遺跡をグリット（発掘地点）を基に約百箱に分類。

＊さらに種類ごとに数十の小箱に細分します。

◀昭和五十　年の発掘

右ページの注釈

※1　土師器
古墳時代の装飾のないすべすべした土器

※2　ふき石
古墳を保持し、土台となる石。緒立の場合、大きさは約二十～四十センチ。

※3　古　墳
三世紀末～七世紀ごろに築かれた墳墓。天皇、豪族などの有力者の墓であり、鏡、武器、はにわなどの副葬品もいっしょに埋められた。新潟県では菖蒲塚古墳（巻町）が有名。

※4　円　墳
丸い小山のような古墳

※5　前方後円墳
前が四角で後方が丸い古墳。仁徳天皇陵が代表的例。

※6　円墳であることが確認
従来は、形状から前方後円墳であると考えられていた。

※7　須恵器
古墳時代から平安時代に作られた陶器

◎日本の古代史は、縄文時代（数千年前～紀元前三世紀）弥生時代（紀元前三、四世紀～紀元後四世紀）、古墳時代（四世紀～七世紀）に分けられ、緒立遺跡は、縄文の末期か弥生の初期から（東日本でもっとも古い）、平安時代末期にまでおよぶ集落址であると考えられている。